



2012. 12. 28

創業50周年記念、思い出をたどる(6)

▽来店のお客さまの中には—

客商売でお客さまについて他言することはタブーだが、すでに紹介したように、村上春樹さんはご自身で著書に書いておられるからいいとして、昔のことゆえお許しをいただくとして思い返すと・・・

一時期は、千社札のごとく天井に名刺が張られていたこともあったが、改装の際にはがされた。

その名残なのか、入り口の天井には1968年夏に、メタルに刻まれた2名の名前が見られる。



(写真：名前はよく読めないが・・・)

▽神戸だけに外国船の船員も多く来られたようで、「薬があるよ」と声をかけられて見るとアスピリンだったとか、「いい映画会があるよ・・・」といわれて行くと、「世界の街角」風の観光映画だったという逸話もあったという。

▽1966年夏には、「007は二度死ぬ」(1967年6月公開)の姫路城ロケ終わり、ショーン・コネリーさんが来店。お客さまによると、作家では陳舜臣さんも時々こられていたようで、ご自身の作品に登場する。

今年の夏、韓国のスターが神戸公演の際に来店されて、店頭から道路はファンに囲まれてひと騒ぎとなったことも。

▽デートコースの定番

なじみの方からは、異口同音に若者の初デートに「ピノッキオ」はふさわしいチョイスで、かつては店内の照明も今に比べれば暗かったと。ピザだけが評判なのではなく、パスタ、自家製ハム、アンチョビ、カキの燻製などもお勧め。特に、オーナーの神戸市北区にある自宅は、冬場には外気温が低くて加工にはふさわしく、オーナーの力が入るところだ。

いまでも人気メニュー・イカ墨のパスタもお勧めと、彼女に勧めた某氏の思い出話。ふと彼女の口元を見れば、お歯黒に。それが「キマリ」になったかどうかはさてさて？このイカ墨パスタ、あの黒さは見た目どおりのイカ墨だと思われ

ているが、実はヒミツが秘められている。トマト丸々ひと玉のサラダに添えられたソースもひと工夫が凝らされていて、それらの謎解きは店で・・・

▽「ピノッキオ」発の文化が・・・

今回、昔なじみのお客さまからは、ギターのリブタイムがあったことを懐かしがる声を多くの方から伺った。前の回にも紹介したが、ここで活躍のギタリストのK. Nさんはその後、大阪・北新地や京都のライブハウスでいまでも活躍していることが分かった。もう一人も、高松市で活躍中だとか。方や、店の片隅に置かれた二つのボンゴや、自動演奏ピアノ(WURLITZER)が故障したままなのは寂しい光景だ。その演奏用のロール十数本が残されているとのことなので、その懐かしい音が戻る日の近いことを願いたい。

ピザにシリアルナンバーをつける店が、盛岡市、新潟県上越市などにも見られるようで、これも神戸発の「文化」が拡散されたかと思えば、楽しいことだ。

▽このシリーズは今回で終えるが、次のナンバリングは何枚目の節目を刻むことになるのかが楽しみだ。そのときには、若い頃に父親にたしなめられた山中オーナーの鼻は、ピノッキオの鼻のごとく長く伸びることはないだろう。(完)

逢坂 御堂

